

《資料紹介》 ^{かみのやま}大館市上ノ山Ⅰ遺跡出土の鋒形石器について

大 野 憲 司

1 はじめに

ここに紹介する2点の“鋒形石器（ほうけいせっき）”は、昭和62（1987）年、秋田県大館市上ノ山Ⅰ遺跡の発掘調査で出土した石器である。

この石器については、既に発掘調査報告書でその概略が報告されているが、^{（註1）}その中でこの石器の観察等については殆ど触れられていないため、ここで改めて2点の鋒形石器の観察を行い、その特徴等について紹介しようとするものである。

この石器の名称である“鋒形石器”は後述するように、大正13年8月、当時内務省考査員（囑託）であった柴田常恵氏が岩手県気仙地方を踏査した際の記録を、これに同行した（岩手県）史蹟調査員の小田嶋祿郎氏が9月に岩手日報紙上に紹介したときの名称である。^{（註2）}

なお、本稿を進めるに当たり、発掘調査時の状況などについては、昭和62年度刊行の発掘調査報告書を参照すると共に、調査担当者である桜田隆氏より種々のご教示を得た。

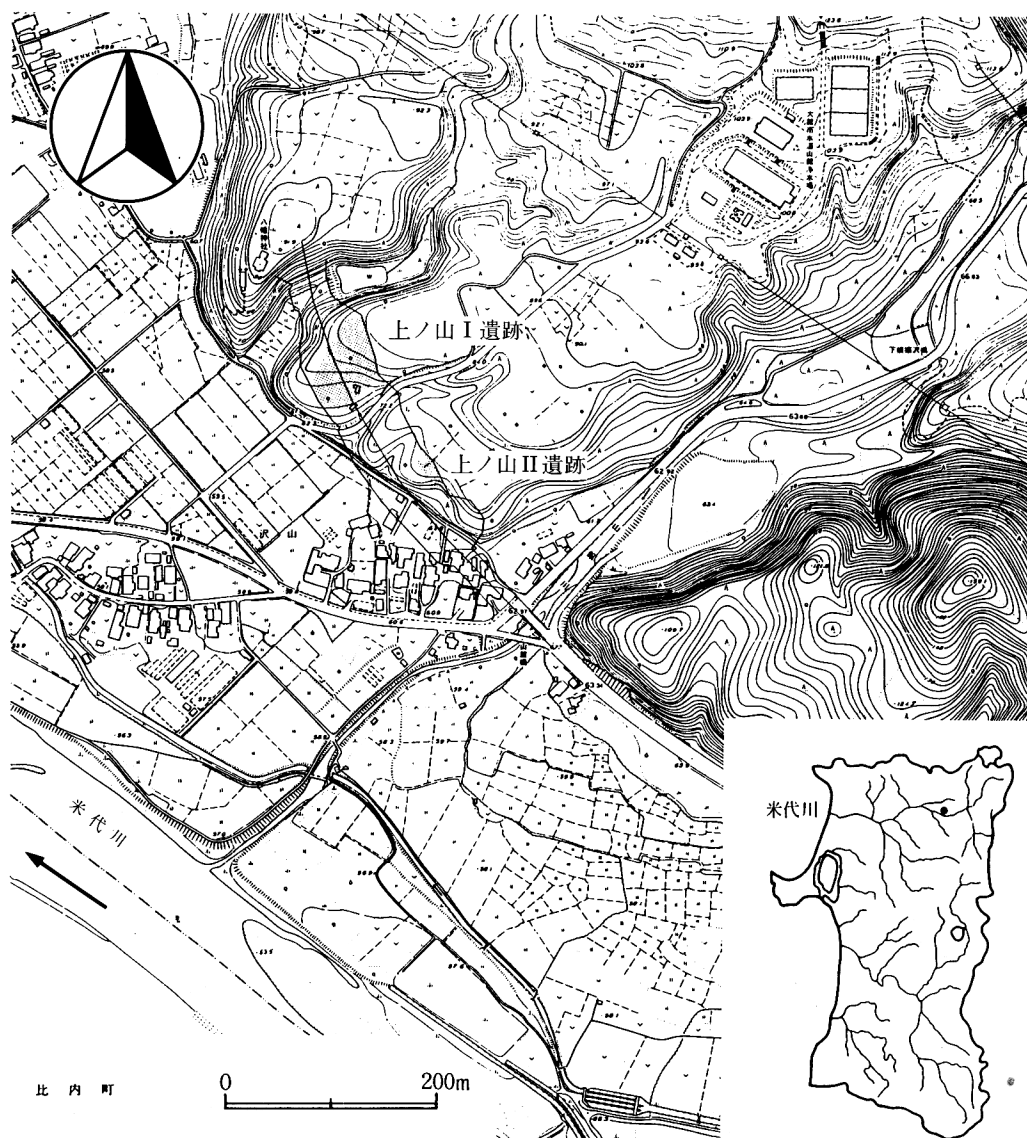
2 上ノ山Ⅰ遺跡の概要

（1） 遺跡の立地

上ノ山Ⅰ遺跡は、秋田県大館市山館字上ノ山56-1外に所在する縄文時代の遺跡である。

遺跡が立地する上ノ山台地は、大館市街地の東側に位置する高森（海拔593m）を中心とする山地の南西側縁辺に当たり、秋田県の北部を東から西に流れる米代川の中流域右岸にある。米代川の上・中流域には、十和田火山噴出物とその二次堆積物からなる第四系鳥越段丘や関上段丘などが散在し、上ノ山台地は関上段丘に相当する。

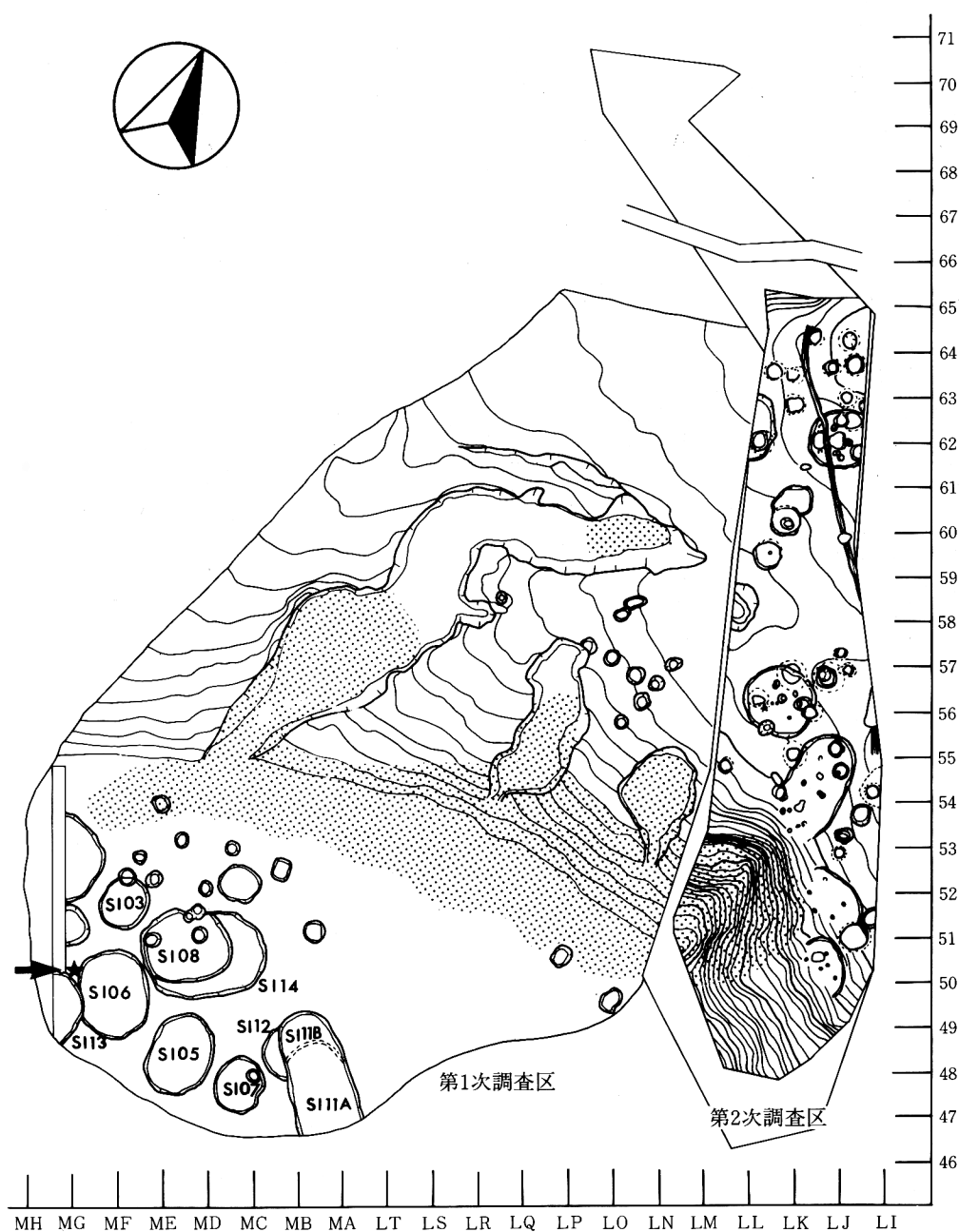
上ノ山台地の南東側と北西側には沢が入り込み、台地全体としては幅（南東-北西）約230m、長さ（北東-南西）約320mの規模で、これまでに大館市や秋田県教育委員会が行った数次にわたる発掘調査の結果からすれば、この台地全体が縄文時代から平安時代の遺跡と考えられる。上ノ山台地の中央部には、台地の南西側を縦に二分するよう形で南西側から小さな沢が入



第1図 上ノ山遺跡の位置 (スクリーントーン部分が昭和62年の発掘調査区) (註1より)

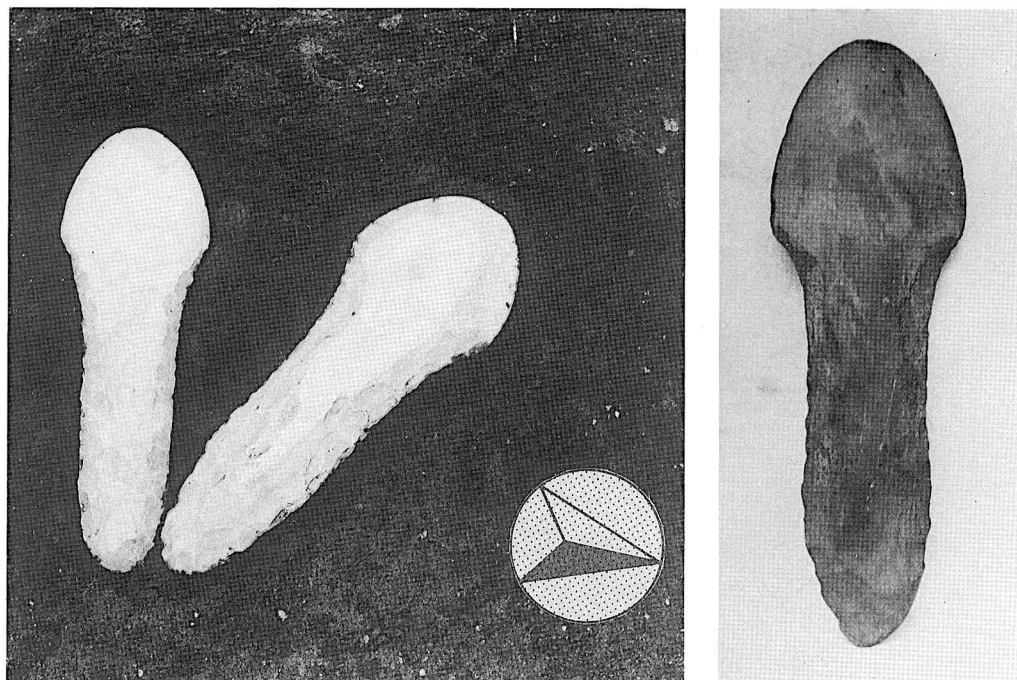
り込んでおり、この小沢の北西側が上ノ山Ⅰ遺跡、南東側が上ノ山Ⅱ遺跡である。上ノ山Ⅰ遺跡の標高は70～90mで、南西方向に漸次低くなるが、その途中に、台地南西縁辺に沿う形で比較的急な斜面が存在する。この斜面を挟んで北東側と南西側は略平坦な面となっており、発掘調査においては、北東側を上位面、南西側を下位面としている。また、台地南西下の沖積地の標高は約60mで、米代川までの距離は400m余りである(第1図)。

なお、昭和62年の上ノ山Ⅰ遺跡の発掘調査は、国道103号道路改良工事に係る事前調査として実施されたもので(第1次調査)、その後、平成2年度にその拡幅部分として62年度調査区



第2図 上ノ山Ⅰ遺跡 第1・2次発掘調査区遺構・グリッド配置図

の南東側が発掘調査（第2次調査^(註5)）されている。第1・2次の発掘調査区は、上ノ山Ⅰ遺跡の西端部に当たり、その縁辺部は砂利採取のために既に破壊されていた。



第3図 上ノ山Ⅰ遺跡鋒形石器出土状況(左)と、岩手県二度成木沢遺跡出土の鋒形石器(右)
(縮尺不同)

(2) 昭和62年の発掘調査の概要

昭和62年度の発掘調査(第1次調査)は、昭和62年7月22日～12月21日に実施され、上・下位面合わせて3,810㎡を調査している。2点の鋒形石器は下位面から出土しており、下位面の基本層位は以下のとおりである。

- 第Ⅰ層 黒色～黒褐色土 層厚15～30cm 耕作土で風乾すると白っぽくなる。
- 第Ⅱ層 黒色～黒褐色土 層厚10～30cm 大湯浮石粒が若干混入する。
- 第Ⅲ層 黒褐色土 層厚15～10cm シラス(軽石粒)が疎入する。
- 第Ⅳ層 再堆積シラス 層厚20～60cm 部分的にシラスが分解し、軽石層と砂層に分かれて
いるのがみられる。
- 第Ⅴ層 黒褐色～暗褐色土 層厚10～20cm シラス(軽石粒)が密に混入する。
- 第Ⅵ層 黒色～黒褐色土 層厚10～20cm シラスが疎に混入する。
- 第Ⅶ層 暗褐色土 層厚10～15cm 強粘性の漸移層。
- 第Ⅷ層 明黄褐色土 地山。

I～Ⅶ層は、その色調・土質等によってI～Ⅲ層が黒色土帯、Ⅳ層がシラス帯、Ⅴ～Ⅶ層が黒色～暗褐色土帯に分けられており、Ⅱ層とⅢ層の間には大湯浮石層が挟在する。第I～Ⅲ層からは、縄文時代早期から弥生時代の土器が混在して出土している。第Ⅳ層は、上位面の地山

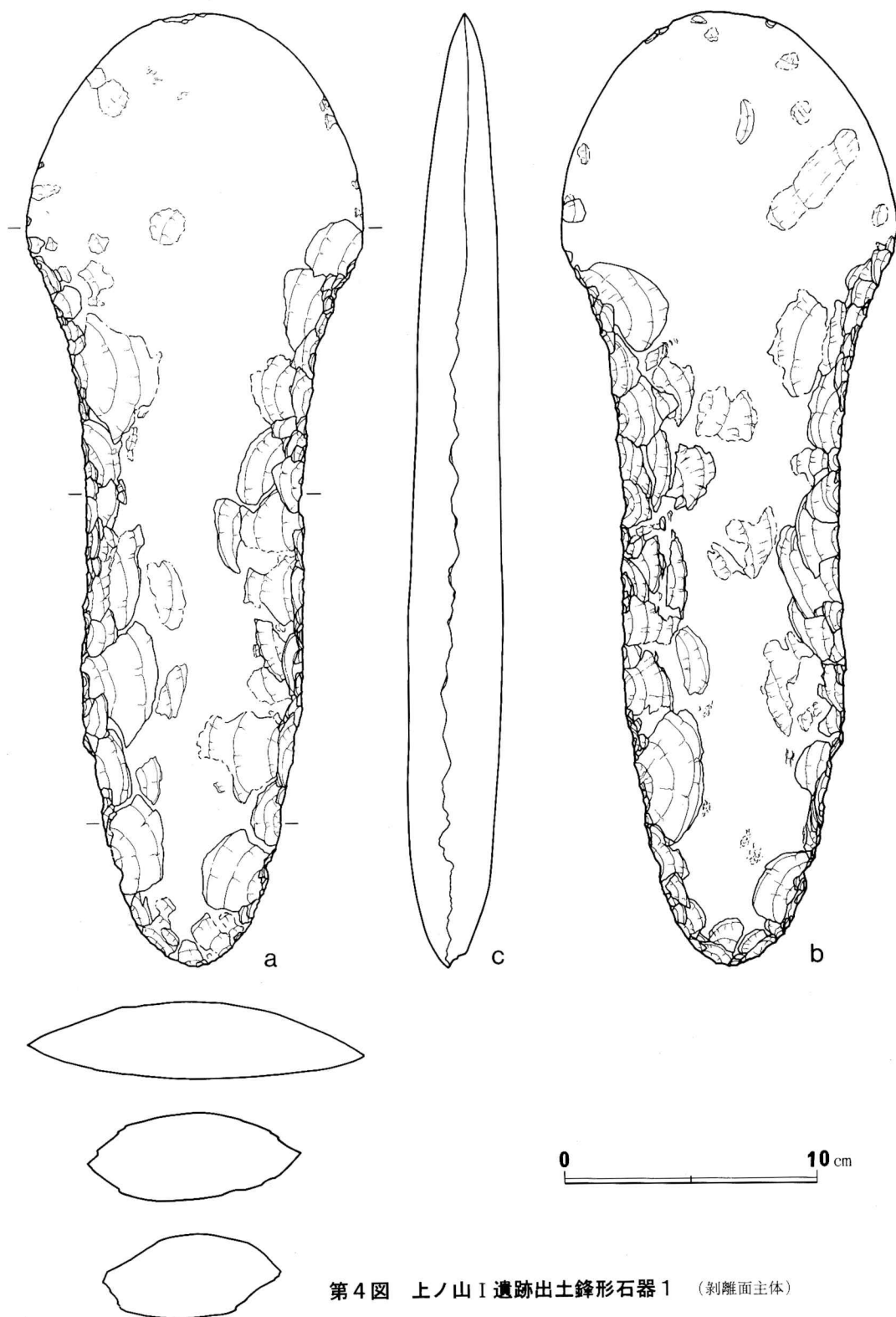
土である関上軽石質火山灰層が侵食、開析作用を受けて崩落・流出したいわゆるシラスの再堆積層であり、遺物はこのシラスの流出と共に移動しているものが多い。第Ⅳ～Ⅵ層からは、縄文時代前期の円筒土器下層a・b式土器（以下、円筒下層a・b式土器と呼ぶ）が混在する形で出土しているが、a式が多い。従って下位面の土層は、第Ⅶ層の上にⅥ・Ⅴ層が形成された（上位面からの流入か否かは不明）後に、大規模なシラスの流入があってⅣ層が形成され、その後上位面からⅢ～Ⅰ層が流れ込んで堆積したものである。Ⅲ層が流入・堆積した後に、10世紀に降下したと言われる大湯浮石層が形成されている。

調査の結果、遺構は上位面から斜面の肩にかけて10基の土坑（うち8基はフラスコ状土坑）が、上・下位面の間の斜面からは大きな捨場（このうち3カ所に沢状の大きな窪みがあり、遺物はこの部分に特に集中している）、下位面からは竪穴住居跡9軒・竪穴状遺構3基・土坑16基（フラスコ状土坑1基）が検出された。なお、下位面は上部（第Ⅰ～Ⅲ層）と下部（第Ⅳ～Ⅶ層）に分かれ、下部からは縄文時代前期円筒下層a・b式土器期の竪穴住居跡8軒、竪穴状遺構1基が検出されている。

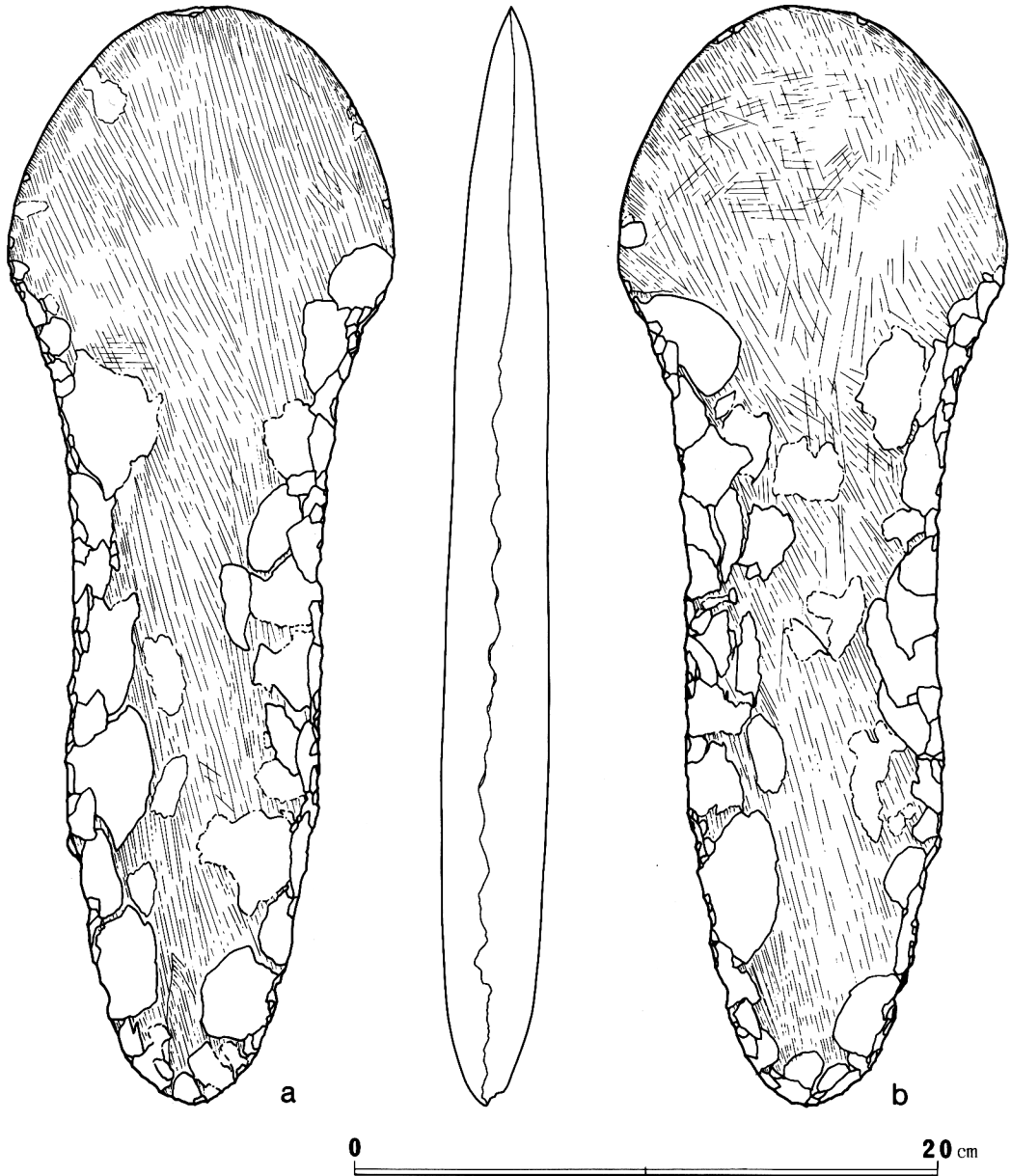
（3） 鋒形石器の出土位置・層位・状況

2点の鋒形石器は、上ノ山Ⅰ遺跡の下位面の調査区南西部から出土している。下位面の調査区南西部には、縄文時代前期円筒下層a・b式土器期と推定される竪穴住居跡が密集しており、2点の鋒形石器は、そのうちのSI06竪穴住居跡とSI13竪穴住居跡が一部重複する部分の僅かに北側（MF50グリッド）から検出された（第2図★印）。2点の石器の出土状況は、セットで埋納（埋置）されたと考えられるような状態である。もっと詳しくこの状態を見てみると、2点の鋒形石器ともに偏平な面をほぼ水平にし、基端がほぼ接する状態である。そして、鋒形石器の刃部側を上にして見た場合、第4図－1の石器（第4図a面が上）が右側、第6図－2の石器（b面が上）が左側に配されており、両者の器長軸線のなす角度が約40度を開いている（第3図左）。第4図－1の石器の長軸線方向は、磁北から約60度西に振れている。

出土層位は厳密ではないが、基本層位のⅤ層よりは確実に下で、Ⅵ層に相当するという。また、下位面の8軒の竪穴住居跡は、いずれも基本層位の第Ⅴ層上面付近から掘り込まれたものと考えられており、それらよりも下部から掘り込まれた遺構は存在しない。このことから、下位面における縄文時代前期円筒下層a・b式土器期の生活面は、ほぼ基本層位の第Ⅴ層上面付近に存在したと推定される。以上のことから、2点の鋒形石器は、第Ⅴ・Ⅵ層中に包含されている他の遺物と同様に遺棄された遺物とは考えられず、何らかの形で埋納（埋置）されたもので、しかもその時期は前述の8軒の竪穴住居跡の構築時期とほぼ同じと推定することが出来る。なお、埋納するための土坑等のプランは不明である。



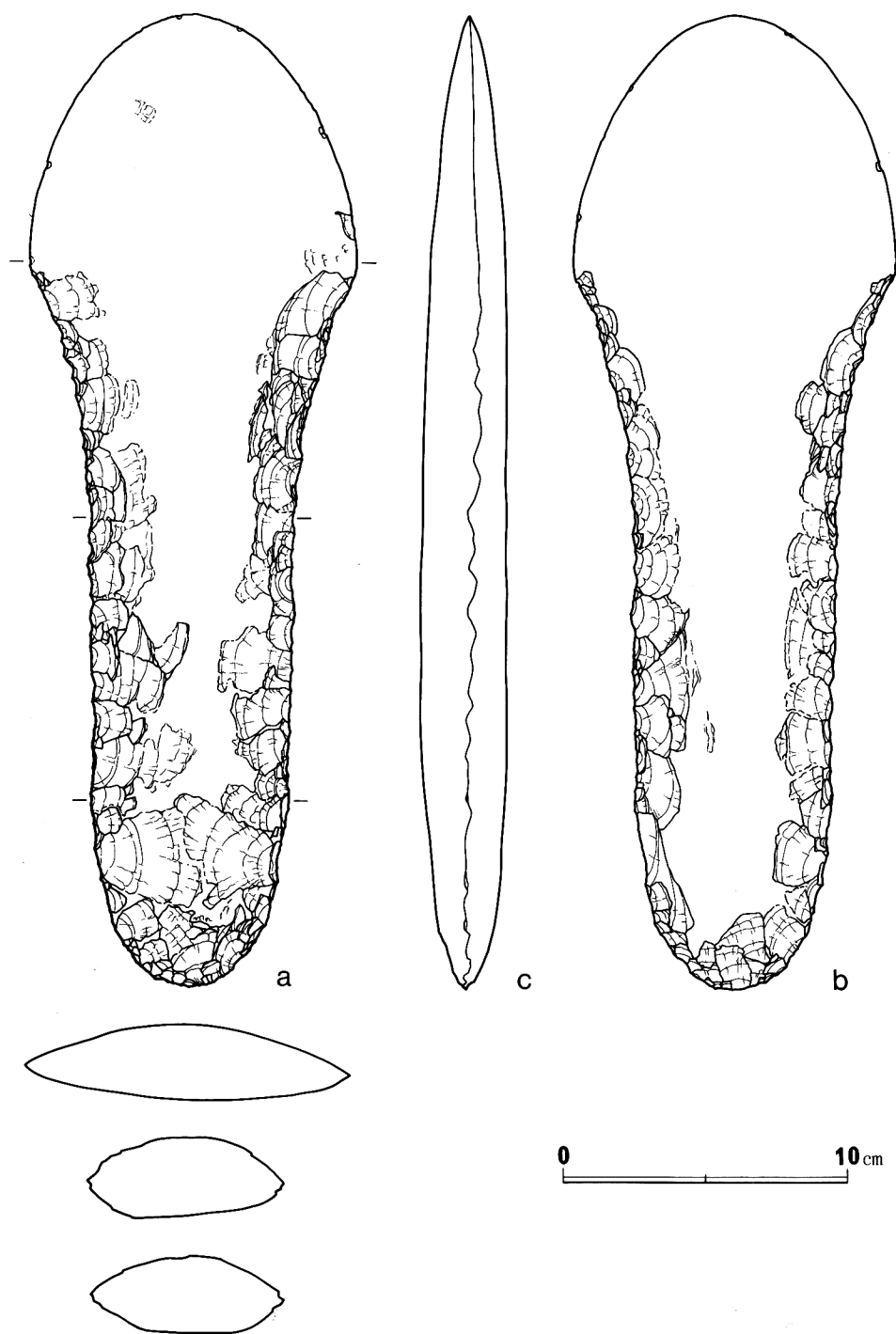
第4図 上ノ山Ⅰ遺跡出土鋒形石器1 (剥離面主体)



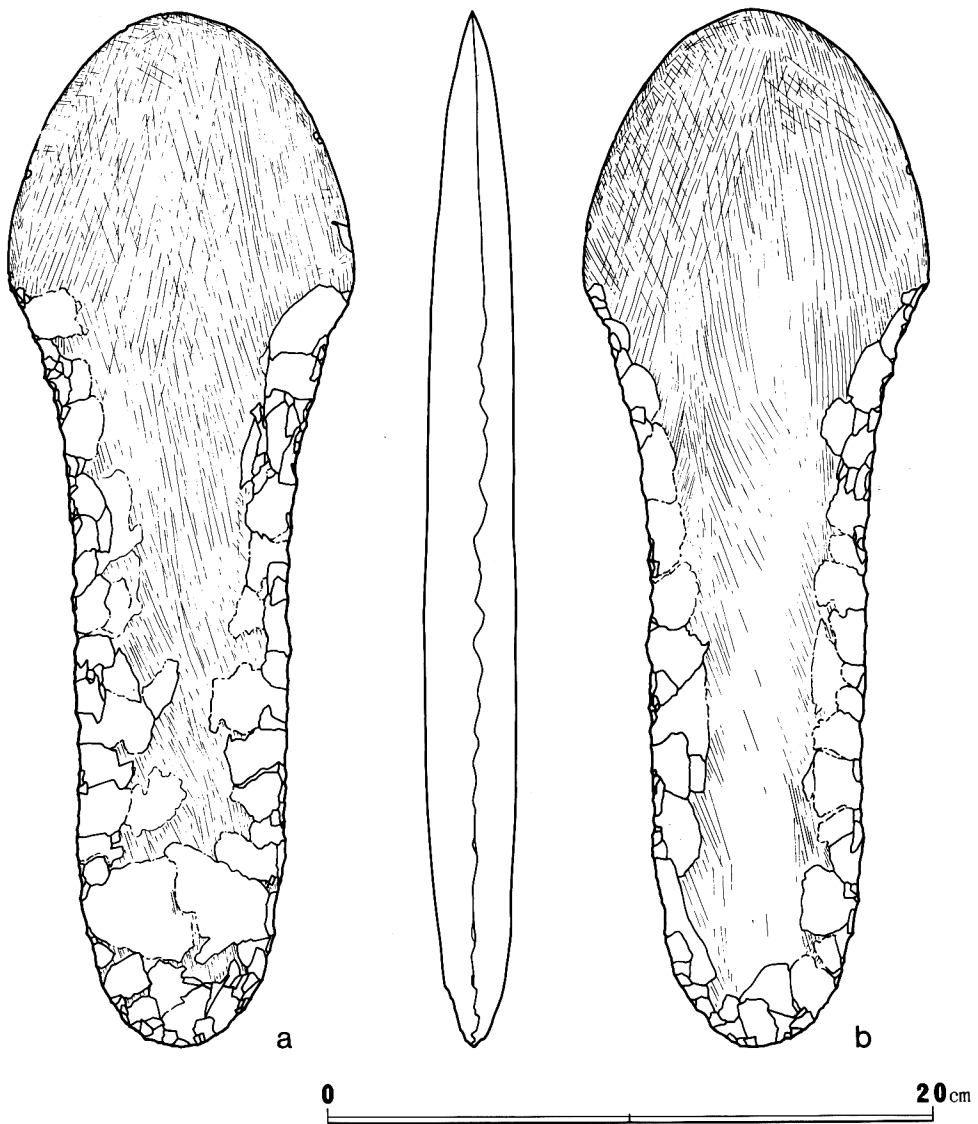
第5図 上ノ山Ⅰ遺跡出土鋒形石器1 (研磨痕主体)

3 上ノ山Ⅰ遺跡出土の鋒形石器 (第4～7図)

第4～7図が上ノ山Ⅰ遺跡から出土した鋒形石器である。2点の鋒形石器の実測図は、大きな方を1、小さな方を2とし、第4図には1の剝離面を、第5図には1の研磨痕を、同様に第



第6図 上ノ山Ⅰ遺跡出土鋒形石器2 (剥離面主体)



第7図 上ノ山Ⅰ遺跡出土鋒形石器2 (研磨痕主体)

6図には2の剝離面を、第7図には研磨痕を主に示した。

2点とも緑灰色の岩石(緑色凝灰岩と思われる)を素材に、これを成・整形・研磨して、全体の形状を扁平な鋒形ないしは杓文字状に仕上げたものである。先端側には、磨製石斧刃部に似た半円状あるいは半楕円状の大きくて鋭い刃部が作出されており、その下に、器全体の3分の2以上を占める柄部が付いている。柄部は、基端が丸みをもってやや尖る短冊状を呈し、刃部へと続く部分は緩い弧を描いて扇状に広がる。器各部の断面形状は、凸レンズ状を呈する。石

器の規模は、1が長さ376mm、刃部長96mm、刃部最大幅132mm、柄部幅86mm、柄部厚34mm、重さ1.954gで、2が長さ340mm、刃部長90mm、刃部最大幅114mm、柄部幅72mm、柄部厚29mm、重さ1.311gである。

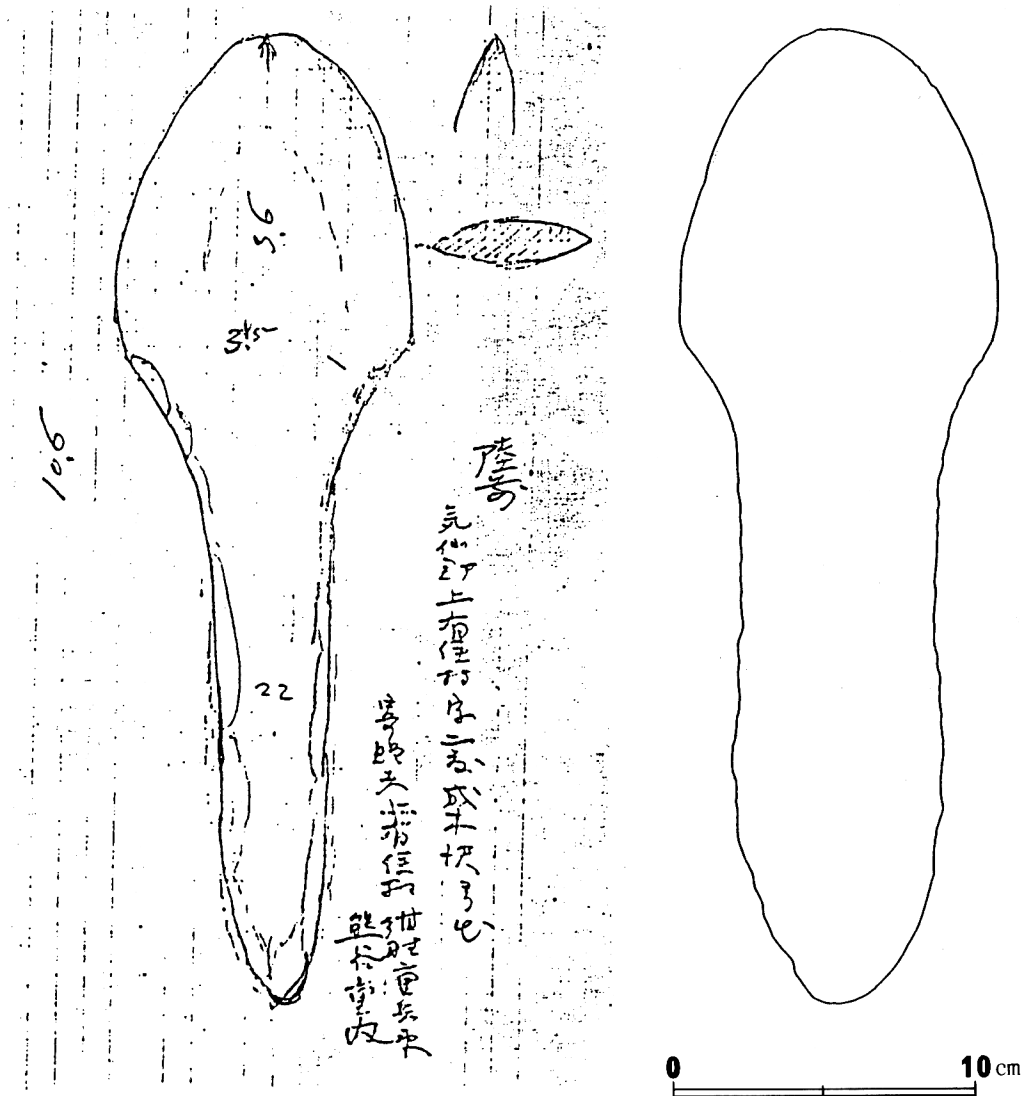
2点の石器は、柄部に残る剥離痕等から、以下のように製作されたものと推定される。① 緑灰色の大きな円礫を打割して、完成した石器よりも一回り大きな素材を用意する。② 成形のための剥離を行う。③ 器全体を鋒形あるいは杓文字状にするための整形剥離を両側縁を中心に施す（両側縁を除く部位には敲打が行われた可能性もあるが、その痕跡は明瞭でない）。④ 全面を研磨する。この時、両側縁の整形剥離痕は、一部その稜線に研磨が及ぶものの大部分はそのまま残される。以上のうち、②の成形剥離は1回の剥離面が大きく、器面に対して平行もしくは緩い角度であるのに対し、③の整形剥離は剥離面とその角度が徐々に小さく急になり、階段状剥離も行われている。また、④の研磨は、刃部以外は器長軸線に平行するか若干斜行する方向で器中央の剥離面を一部残しながら施される。これに対して、刃部の研磨は丁寧で、その方向は器長軸線に平行するのを主体とするが、これに直交するものや斜行するものもある。そして、刃縁（端から5～10mmの間）の研磨は特に入念で、研磨痕は、刃部を上にして見た場合の右側が刃縁に略平行し、左側が刃縁に直交もしくは斜交する。^(註6)なお、刃部側にも研磨によって除去しきれなかった剥離痕が僅かに残っている。

刃部の平面形状は円刃で、側面形状は薄くて先端が鋭く尖る両凸刃である。刃部に明瞭な使用痕や刃こぼれは無く、柄部にも着柄痕は見えない（第4図1の刃縁中央部には、僅かにガジリがある）。ただし、柄部両側縁の稜が全般に摩滅しており、その中でも1では柄中央部（石器の重心付近で長さ9～10cmに及ぶ）と基端、2では基端に近い部分（長さ8～9cmに及ぶ）が特に摩滅している。摩滅の原因は明らかではないが、手ズレによる摩滅あるいは素手で持つための刃潰し様の調整（皮革などによるナデもしくはミガキ？）が加えられたとも考えられる。^(註7)

4 鋒形石器の類例

上ノ山Ⅰ遺跡出土の鋒形石器と同様の石器は、岩手県気仙郡住田町二度成木沢（ふたなぎさわ）遺跡と、秋田県鹿角市八幡平から各々1点ずつ出土している。

二度成木沢遺跡の鋒形石器は、大正13年（1924）8月、柴田常恵氏が史跡指定調査のため岩手県を訪れた時に着目したものである。その際のフィールド・ノート中のスケッチ（第8図の左側）と、その時の写真^(註8)（第3図右側で、これの外形線をトレースしたのが第8図右側である）によれば、石器は全長10寸6分（約321mm）、刃部長3寸6分（約110mm）、刃部最大幅3寸5分（約106mm）、柄部中央幅2寸2分（約67mm）である（厚さの記載なし）。この石器は、基



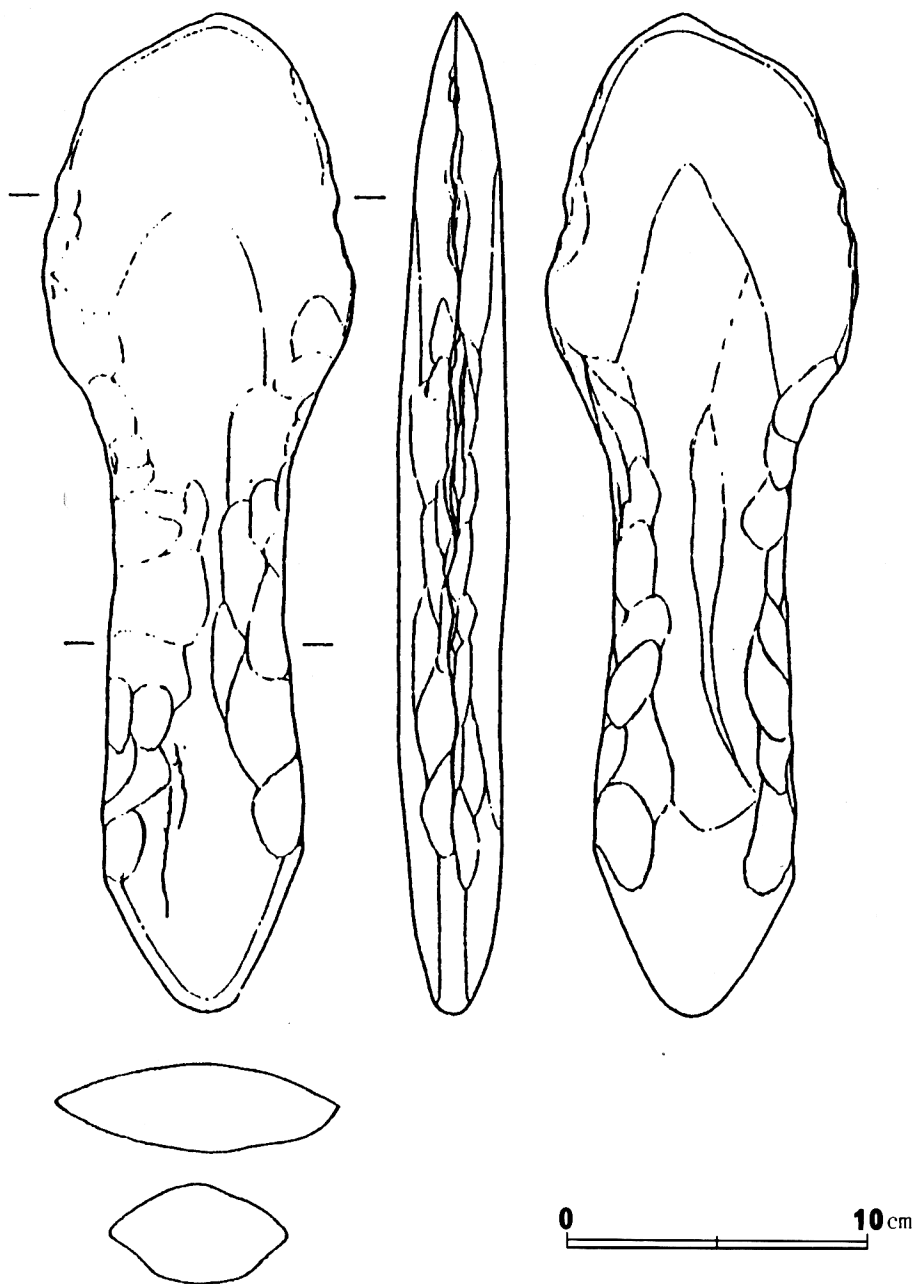
第8図 二度成木沢遺跡出土の鋒形石器

柴田常恵氏のスケッチ(左)と、写真から推定される同石器の外形

端が上ノ山Ⅰ遺跡例に比べると若干尖る以外は上ノ山Ⅰ遺跡の石器に酷似している。なお、冒頭で触れた小田嶋祿郎氏の岩手日報紙上（大正13年9月24日付）の「気仙の史蹟踏査（三）」と題した文の抜粋は以下のごとくである。

『柴田氏は直ちに遺物を一覽したが緑泥片岩製の鋒形石器に目を止めた。1尺7寸^(註9)の大石器を手にして、どうも接触が疑はれる、と首をひねる。なにしろ研究物だと繰返して見て居られた。ソレより佛像などを鑑定して梵字岩に向かった。（後略）』

この石器に付いての記事はこれだけで、二度成木沢遺跡及びこの石器の時期や伴出遺物等に



第9図 鹿角市八幡平字永田瀬根出土の鋒形石器 (註10より)

については不明である。

鹿角市八幡平の例は、昭和36年（1961）頃、八幡平字永田瀬根で高畑宇一氏によって発見されたものであるが、出土地点は明確でないという。この石器は高畑氏から鹿角市に寄贈されており、佐藤 樹・古川 孝政氏が以下のように紹介している。^(註10)『扁平で杓文字の柄を太くしたよ

うな形をしており、打ち欠きにより整形され、丁寧な研磨が加えられている。柄の両側縁には明瞭な剥離痕が残り、半円状を呈する刃部は、鋭く作り出されている。大きさは、長さ33.1cm、刃部幅10.3cm、柄幅7.1cm、厚さ3.5cm、重さ1400gを計る。石材は緑片岩で、刃部には使用痕は認められなかった』。紹介中の実測図（第9図）によれば、上ノ山Ⅰ遺跡例に比べて刃縁がやや乱れており、基部から基端にかけて丁寧に研磨されている点で異なるものの、全体の形状等はよく似ている。時期は明確ではないが出土地点・層位からみて、縄文時代前期のものである可能性が高いという。

5 ま と め

このような鋒形石器はこれまでのところ、以上に述べた4点が知られるだけである。

この石器は、緑灰色～緑色を呈する緑泥片岩あるいは緑色凝灰岩を用い、それを剥離によって杓文字状に成・整形した後、特に入念な研磨によって大きくて鋭い刃部を作出した石器である。刃部の状況は、薄い磨製石斧の刃部に似ているが、刃縁が半円状の弧を描き、これに長い柄が付く。そして大きな特徴は、この石器の全長が30cmを超え、重さが1kg以上で、使用痕や着柄痕が無いことである。また、出土状況が他の2遺跡では不明ながら、上ノ山Ⅰ遺跡では、縄文時代前期円筒下層a～b式土器期の生活面よりも下位の層中から、2つの鋒形石器が水平に、基端が接し刃部側が約40度の角度で開いて出土している。これは、この石器が土坑などの底面に埋納された可能性が強いことを示している。

鋒形石器の機能等については不明のままである。しかし、この石器の特徴や出土状況及び出土例が僅少であることからすれば、縄文時代前期の実用的な道具ではなく、特別の儀式もしくは祭礼等に使用されたものと考えられる。また、この石器の最大の特徴は、埋納される性格を持つことである可能性もある。この意味では、縄文時代草創期と考えられている神子柴型尖頭器・石斧や、秋田県平鹿郡東成瀬村上掬遺跡出土の縄文時代前期と推定されている(超)大型磨製石斧が数点まとめられて埋納されたりする例^(註11)と類似しており、それらの石器が持つ性格と同様であるとも考えられる。

ここで、縄文時代のこうしたいわゆるデボについては、縄文時代草創期の石器群を扱った栗島義明氏の論攷がある^(註12)。その中で栗島氏は、該期の8遺跡における石器の特異な出土状態を分析して、デボの一定の特質として以下のように述べている。『単一の或は特定器種を主体に、極めて狭い範囲から集中または折り重なった状態で石器遺物の検出されることを第1の特徴とし、石器製作の痕跡や他の器種を殆ど組成しない点を考慮すべきであろう。また、大半が完形品によって占められている点も同様に看過すべきでない』、としている。そして、デボをデボ

I・II類に分けており、それは以下のごとくである。デポI類は、石器を集積するタイプで、石器は特定の器種によって構成され、石器は斉一性の強い完形品か未製品で占められる。デポII類は、石器を埋納するタイプで、複数の石器が同時に埋められ、特定の器種の中に他の器種が混じり、石器には複数の斉一性がある。また、デポII類の石器の中には、意識的に欠損させたとも取れる欠損品を含み、実用品とは考え難い石器を伴っている。デポI類の中には、儀礼品や威信財的な属性を持つ石器は無く、それらは通常の集落とは離れた場所（＝移動生活の中で将来その場に巡って行くところ）に埋められる、としている。

栗島氏のデポの分類を基準にすれば、対比する時期が異なっているものの、上ノ山I遺跡の鋒形石器や上掬遺跡の（超）大型磨製石斧の埋納の例は、器種が単一である点ではデポI類に共通するものの、埋納された石器が非日常的で特殊な完成品であることではデポII類にも類似している。しかし、栗島氏のデポII類が複数の器種の埋納である点で、上ノ山I遺跡・上掬遺跡の例とは同一視できない。このためここでは便宜的に、栗島氏のデポの分類に新たにデポIII類として、非日常的で特殊な完成品だけを埋納するタイプを加えておきたい。上ノ山I遺跡や上掬遺跡の例がデポIII類である。また、詳細は不明ながら、二度成木沢遺跡や八幡平字永田瀬根の場合、鋒形石器が単体で埋納された可能性も否定できない。

これまでのところこの石器の出土は、東北地方北半部に限られていることから、縄文時代前期円筒土器（下層）分布圏に属する可能性が強い。しかし、円筒土器分布圏以南にも鋒形石器にその形がやや似ている石器として、山形県などの両尖匕首が知られており、また福島県牧場山遺跡11号土坑出土の槍先形尖頭器^(註13)も、整形技法や大きさの点で異なるものの、石器全体の形状などには共通点もあり、今後、それらをも含めた対比・考察が必要と思われる。

最後に、この石器を紹介するように薦め助言して下さった富樫泰時氏、種々の資料をお寄せいただいた熊谷常正氏、調査担当者の桜田隆氏に感謝申し上げる次第である。

註1 秋田県教育委員会 『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I

― 上ノ山I遺跡・上ノ山II遺跡 ―』 秋田県文化財調査報告書第173集 1988（昭和63）年

註2 このことを知るきっかけは、船木義勝氏が、上ノ山I遺跡出土のこの石器を岩手県立博物館の熊谷常正氏に問い合わせたことによるもので、後述する二度成木沢遺跡出土の鋒形石器についての全ての情報は熊谷氏によるもので、今回ここに紹介することにも快諾を得ている。

また、この記事のみからは、鋒形石器という名称が柴田氏によって付されたものか、小田嶋氏によるものか明確でないが、前後からして柴田氏による命名の可能性が高い。

註3 大館市史編纂委員会 『大館市史』 第1巻 1979（昭和54）年

註4 註1と同じ

秋田県教育委員会 『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ —上ノ山Ⅱ遺跡第2次調査—』 秋田県文化財調査報告書第193集 1990（平成2）年

註5 秋田県教育委員会 『国道103号道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ —上ノ山Ⅰ遺跡第2次調査—』 秋田県文化財調査報告書第211集 1991（平成3）年

註6 刃部の研磨の方向と砥石については、以下のように推測することも可能である。

刃縁に近い部分の研磨を除いては、1回の研磨の単位が長く平行する研磨痕が多いことや、第6図2-b面の中央から基端にかけて原石の風化面がやや窪み形で残っているが、この部分には研磨による擦痕がほとんど見えない部分があることなどから、2点の石器の研磨に使用された砥石は、砥面が略平坦な大型のもので、据えられた状態で使用されたものと推定される。また、このことと刃縁の研磨の方向からすれば、2点の石器を研磨した人物は同一人で右利きであったと推測される。

註7 この石器に対しての“鋒形石器”という名称は、この石器の全体の形状から付された名称であろうことは想像に難くない。しかし今、その製作工程と出来上がった製品を見てみると、大きさや重量を別にすれば、この石器が磨製石斧に極めて似ていることがわかる。通常の磨製石斧と異なる点は、刃部から柄部への移行部の形状と両側辺に平坦面がないことである。用いられた石材も緑色凝灰岩と思われるもので、縄文時代前期の磨製石斧に多用される石材である。鋒形石器が、特殊化した磨製石斧である可能性があるという認識も意識の中に入れておきたい。

註8 このフィールド・ノートのコピーと写真が国学院大学乙益教授の手許にあり、これを熊谷氏が複写したものを入手したものである。

註9 柴田常恵氏のスケッチでは鋒形石器の法量が寸単位で記されており、全長は10.6（10寸6分）とある。従って、ここでの1尺7寸は1尺7分の誤りと思われる。

註10 佐藤樹・古川孝政 「鹿角市八幡平出土の鋒形石器」 『よねしろ考古』 第6号 1990（平成2）年

註11 庄内昭男 「秋田県東成瀬村上掬遺跡出土の大型磨製石斧」 『考古学雑誌』 第73巻第1号 日本考古学会 1987（昭和62）年

註12 栗島義明 「デボの意義 — 縄文時代草創期の石器交換をめぐる遺跡連鎖 —」 『研究紀要』 第7号 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990（平成2）年

註13 福島県教育委員会 『東北横断自動車道遺跡発掘調査報告7 牧場山遺跡（第2次）・北向遺跡』 福島県文化財調査報告書第232集 1990（平成2）年